

傾国の美姫の『影』になりました

後宮の見習い侍女は、
主人のために暗躍したい

秋月一花 Ichika Akizuki



アルファポリス文庫

3 傾国の美姫の『影』になりました

序章 故郷から異郷の地へ

山奥に、小さな村がある。

住んでいる村人は少ないが、互いに支え合って生きていた。畑で野菜が採れたらお裾分けをし、川で魚を釣つたら一緒に料理をし、山で自生している山菜を探つては、あく抜きを手伝う。

そんな自給自足の村で育つた一人の少女が、村の門の前で立っていた。

白白明けの時間帯。少女は空を仰ぎ、闇空が薄明るく透けていくのを見つめている。

「本当に村から旅立つのかい？」

朱亞

村長が心配そうに声をかけたのは、小柄な少女。

朱亞と呼ばれた少女は、肩まで伸びた翡翠のような翠色の髪を一つに結び、若緑色の大きな瞳をらんらんと輝かせながら、村長に視線を移してこくりとうなずいた。

「もちろんよ！ おじいちゃんも、亡くなる前に『好きなように生きなさい』って言つてくれたから……」

懐かしむように目を細める彼女に、村長は目を伏せて「そつか」と小さくこぼす。

彼女のために用意した荷物を、すつと差し出す。

ほころ
を淀ませた。

「餞別だ。……本当に、みんなに最後の挨拶あいさつをしなくていいのか？」

村長は腰に手を添えて微笑む。朱亞は暮らしていた村を見渡して

縦に動かす。

「だって、会えば揺らいじやうから。昨日、あんなに別れを惜しんでくれたのに、やつぱり残る！ なんて格好がつかないでしよう？」

昨夜の送別会の様子を思い出し、朱亞は軽く頬をこすり

しっかりと背負つてから、明るい表情を浮かべて大きく手を振った

「饅頭をあらかどん！ 柄長さん！」

「は
い
！」

こうして朱亞は、十五年間過ごしていた村から旅立つた。

山奥の木から別の木へと
村長から受け取つて裁判の中二、村

木長から受け取った餉物の中に、木は残っていた古い地図があつた。地図を片手に山を歩く。旅立つてから数日は、平穏そのものだった。道に迷うことなく足を動かしてはいたが、所詮十五歳の少女の足。

疲れては休憩を繰り返し、荷物から食料を取り出してはもぐもぐと食べた。食べ終えたら地図を頼りに歩き、村の近くで山に自生している山菜を探り、売りにいく。

古い地図だから、廃村になつてゐる場所もあつたが、必要なものは村で物々交換をしたり、一泊させてもらつたりと、初めての一人旅にしてはかなり順調に進んでいた。村々を訪れるうちに、酷い風邪で寝込んでいる人たちが増えた。朱亞は生まれた山奥の村で教わつた治療法を実践し、村人を助けることもあつた。お礼と称していろんなものをもらつたためとても助かつた——という話を、とある民家でしていたときのことだった。

「一人旅をしていて、大丈夫なの？」

朱亞を泊めてくれた民家の女性が、一人旅の心配をしてくれた。山賊や盗賊、獐猛（アカミツ）な野生動物に遭うのではないか、と。

「今のところ、大丈夫です。野宿にも慣れてきました！ そして、お布団のありがたさにも気づきました」

この村の人々は風邪で寝込んでいる人が大半だった。咳が頻繁に出て、熱がなくても空咳が出て痰が出にくい人が主だったので、朱亞は植物からとった枯木を使つた

清熱止咳膏^{セイネツシキヤウ}という薬膳^{ヤクゼン}を作り、村人たちに配った。この症状の人たちにはこれが効くのだと祖父から教わっていたからだ。

また、熱っぽく、黄色く粘つて出しにくい痰^{たん}の人には去痰茶^{キヨシクチャ}を作り、飲み方を教えていた。このお茶は美味しいが、飲み過ぎるとかえって身体に悪いから、痰がなくなつたら飲むのを中止するように、と口を酸っぱくして伝えている。

朱亞の作った清熱止咳膏と去痰茶がよく効いたのか、飲んだ人から元気になつていった。そのお礼にと村人たちが、あれもこれもいろいろなもの渡し、女性が『旅をしている子がそんなに持ち歩けるわけないでしよう!』と一喝したのは記憶に新しい。

「それでも……村のみなさん、元気になつてよかったです」

「本当、ごめんね。うちの村人たち、限度つてもんを知らないから」

申し訳なさそうに謝る彼女に、朱亞は慌てたように両手を振った。

「いいえ、私のほうこそ。こうして泊まらせていただいて、助かりました」

温かい布団の中でも眠る恩恵を痛感していた朱亞は、もう一度布団を撫でて苦笑した。

「……ところで、朱亞ちゃんの目的地はどこなんだい?」

「そういえば……考えていませんでしたね。ただ、村から出てどんな世界が広がつているのかを、この目で確認したかったから、ある意味ここも目的地かもしれません」朱亞は目を伏せて頸に手をかけ、「うーん」と唸る。すると、女性は目を丸くして「なるほどねえ」とつぶやき、ふとなにかを思い出したかのように「あつ!」と声を上げる。

「それなら、もっと大きな街に行つてみるのはどう? 田舎じゃ見られないこともあります」
「いだろうし、ここら辺よりは安全だろうしね」
自身のことを心配してくれているのだとわかり、朱亞は少しだけ黙り込んだ。だが、すぐに目を開けて顔を上げ、両手を合わせた。

「そうですね! 大きな街には行つたことがありませんし、興味があります」「道は知っているのかい?」

「一応、村長が地図を持たせてくれましたけれど……」

「こりやあずいぶんと古い地図だねえ。ちょっと待つとくれ」

ぱたぱたと足音を立てて簞笥^{たんす}の前行き、引き出しから保管していた地図を取り出しぶっと広げ、朱亞の持っている地図と見比べる。「この地図でよくここまでたどりつけたねえ」と感心したようにつぶやいた。

(私が持っている地図は、そんなに古い地図だったのかしら?)

地図を交互に眺めている朱亞に、女性は小さく笑って、自分が持っている地図を見せる。

「ここがこの村。一番賑わっている街は、南に向かつて……ここ」

女性はすっと人差し指で現在地を指し、つつ、と地図を下になぞる。この村よりも南にあるようで、朱亞は首をかしげた。

東にいけば帝都があるのに、なぜ南に? と。その疑問は彼女の顔に出ていたようで、女性はにんまりと口元に弧を描く。

「この街はね、皇帝陛下が訪れる予定なのよ」

「……皇帝陛下が?」

あの山奥の村ではあまり耳にしない……したとしても、すでに行事が終わっていることが多い『皇帝陛下』という言葉に、朱亞は目を丸くする。

「そう! なんでもこの街には絶世の美女が住んでいるらしいのよ。陛下自ら求婚しにいくつて噂が流れているの! もしかしたらその様子を見られるかもしれないわよ?」

「わざわざ陛下が求婚しに? うーん、絶世の美女は見てみたい気はしますが、陛下が求婚するところはあまり興味ありませんね」

住んでいた村で一番の美人と言われていた女性の姿を思い浮かべ、その人よりも綺麗なのかな? と考えながらも、誰かが誰かに求婚する場面を見たいかと聞かれたら、答えは『いいえ』だった。

「朱亞ちゃんにはまだ早いかしらね? でも、もう十五歳なのでしょう?」

「私、ずっとおじいちゃんと暮らしていたのでそういう話はあまり聞いてなかったんですよね。たぶん、村で暮らし続けていたら村長が結婚相手を紹介してくれたとは思います」

周りには山や森しかない。そんな場所だつたからか、静かで平和な村だつた。一緒に暮らしていた祖父の顔を思い出し、懐かしむように両手を胸元に添える。

「村の人たちはよい人だったのね」

「はい。とはいって、若い人はあまりいませんでしたけど」

子どもは数人しかいなかつた。その子どもたちも大人びていて、朱亞にいろんなことを教えてくれた。だからこそ、旅立つてから驚いたのだ。子どもが泣き叫ぶ声を、初めて聞いたから。

「そつか、どこの村も似たようなもんだねえ」

ぽんぽんと朱亞の肩を軽く叩く女性に、心がくすぐつたりなり身じろぐ。

「それじゃあ、大きな街に行つたら、人の多さにびっくりしちゃうかもねえ」

「行つたことがあるのですか？」

「あるよ、一度だけね。いやあ、すごかつたとしか言えないから、朱亞ちゃんにも体験してもらいたいわあ」

彼女の中ではよい思い出になつてゐるのだろう、朱亞は決意を固めたように両手をぐつと握つた。

「では、その街に行つてみます。目的地ができると、一気にワクワク感が増しますね」

「ははは、そりやあよかつた！」

白い歯を見せて豪快に笑う女性。

お礼をしたいから、と彼女は朱亞を数日自宅に泊まらせ、その間にたくさんの保存食を作つた。朱亞に持たせるためだ。そのお礼に、

朱亞は清熱止咳膏と去痰茶の作り方を教え、彼女たちは互いの知識に感心し合つた。

そして、朱亞が旅立つ日の朝、彼女は保存食の入つた袋を手渡す。

「こんなにもらつていいのでしょうか？」

「ああ、朱亞ちゃんのおかげで咳もよくなつたからね！ それに、おかげで楽しい時間

を過ごせたから、ほんのお礼さ。いいかい？ 充分気をつけて行くんだよ」

「ありがとうございます、お姉さん。お腹が空いたらいだきますね」

もらった保存食をしつかりと鞄の中に入れて、朱亞は頭を下げる。出会う人たちが

親切で優しいな、と心の中をポカポカと温かくさせながら、女性の家を出て、彼女に大きく手を振つた。

手を振り返してくれたのを視界に入れ、くるりと背を向けて歩き出す。

目的地は南の街——銀波。

一章 雨宿りと出会い

村を出たのはまだ東の空が明るくなり始めた時間。教わった通りに歩き、南へずんずんと進んでいく。そのうちに、段々と空が暗くなってきた。

山の天気は変わりやすい。くんくんと空気の匂いを嗅ぐと、雨の匂いを感じた。急いで辺りを見渡していると、なにかが視界を横切った気がして、パッと顔を向いた。しかし、なにも見つからず、朱亞は不安げにきゅっと唇を噛み締める。

空を見上げ、晴れているところと黒い雲が流れているところがあるのを確認し、このままでは土砂降りになるだろうと判断し、目を皿のようにして雨宿りできそなところを探した。

歩いている途中で小屋を発見したので駆け寄り、扉を軽く叩く。返事がないので扉に触れて開けてみると、鍵はかかっていないようで、簡単に開いたが、埃が舞つて思わずゲホゴホと咳き込む。

「……人はいない、みたいね」

埃っぽくがらんとした小屋の中に入り、少しだけ目を閉じて考えをまとめる。まだ

降り始めていないから、と小屋の外に出て近くの草を何本も引っこ抜き、根元を縛り簡易な簫を作つて戻った。

荷物の中から大きめの手拭いを取り出し、鼻と口を覆うようにし、後頭部でぎゅつと結んでからざつくりと小屋を掃除する。

「うーん、すごい埃と蜘蛛の巣」

あまりにも埃っぽくて、つい掃除をしてしまった。掃除が終わつた途端、轟音とともに雨が一気に降ってきた。

あまりにも強い雨に思わず息を吐く。ずぶ濡れになるところだつた、と。

「この雨の強さなら、通り雨……？」

窓から見える線のような雨。この激しさは間違いなく黒雨と呼ぶに相応しい。

ふと、雨音に混じつてなにか……足音のようなものも聞こえた。ぬかるんだ土に足を取られているのか、その足音は遅い。

だが、段々と近づいてきている。時折、「きやあっ」と短い悲鳴も耳に届き、その声があまりにも綺麗で、朱亞は目をパチパチとさせる。

こんなに綺麗な悲鳴もあるのかと感心し、窓辺に移動するとペたりと手をつけて声の主を探した。

外の様子を窺つていると、人の姿が確認できた。なにかに追われているように必死

に走っている。しかし、聞こえてくる足音はその人のものだけで、窓の外をじいっと見つめた。

——徐々に、近づいてくる。

雨に打たれて困っているようだ。朱亞は考えるようすに視線をさまよわせ、すぐに考え方をまとめて窓から離れて小屋の扉を開けた。

「こっちです！」

朱亞の言葉に、その人はホッとしたような表情を浮かべて、小屋の中に駆け込む。「ありがとうございます、助かったわ」

凛とした澄んだ声。先ほどの短い悲鳴の持ち主のようだ。朱亞は緩く首を左右に振った。困ったときはお互いさまだ。

「いきなり降ってきましたものね。実は私も、雨宿りのためにこの小屋に入つたんです。あ、私は朱亞です」

「そうだったの？ あなたは濡れなくてよかつたわね。あの雨、激しくて肌が痛かつたわ。……それと、わたくしは桜綾よ」

桜綾と名乗った女性の容姿に、朱亞は息を呑む。

誰が見ても美人だと口を揃えるだろうと容易に想像がつくくらい、整った顔をしていた。赤や黄みを含んだ深みのある艶やかな長い黒髪。その髪が今は濡れてしつとり

としている。栗皮色の瞳の輝きは、一瞬で引き込まれるような美しさだ。彼女の容姿にうつとりしていた朱亞だが、ハツとして顔を上げて、荷物の中から手ぬぐいを取り出し、桜綾に渡した。

「濡れたままだと、風邪をひきますよ」

「……ありがとうございます。使わせてもらわね」

彼女は瞳に感謝をにじませて手ぬぐいを受け取り、さつそく髪を拭き始めた。ぽんぽんと手ぬぐいに髪を挟み、手際よく水分を吸收させる。

朱亞はもう一枚手ぬぐいを取り出し、彼女と自身の身体を見比べ、少し悩んでから自分には大きすぎる服を取り出した。

祖父が『いつか大きくなったら着ておくれ』と朱亞のために用意してくれた服だったが、自分にはまだ大きいので桜綾に着てもらおう。そう考え、彼女に顔を向ける。桜綾はなにも荷物を持っていなかった。近くに住んでいる人なのかもしれない。だが、どうして手ぶらのまま山に入ったのだろうかと疑問を抱きつつ、それよりも風邪をひかせてはいけないと声をかけた。

「あの……これ、よかつたら」

「……確かに全身びしょ濡れだけど、悪いわ」

「あとできちんと返してくだされば構いませんよ。私にはまだ大きい服なので」

「そう？……なら、厚意に甘えさせてもらうわね。実は、ぐつしょり濡れて気持ち悪かったの」

桜綾は袖を揃まんで苦笑する。その表情さえも美しく、朱亞の鼓動が早鐘はやがねを打つ。こんなに綺麗な女性がいるんだなあ、と思わず惚れ惚れしてしまう。

「わたくしの顔に、なにかついていて？」

「すっごくきれいな人だなあと思って」

素直に自分の感想を口にする朱亞。桜綾は虚を衝かれたように目を丸くしてから、満開の花のような笑みをこぼした。

「素直な子は大好きよ」

なんて茶目っ気たっぷりに言われて、朱亞はポツと頬を赤らめる。

もう一枚の手ぬぐいと着替えを渡すと、桜綾はそれを受け取り「ありがとうございます」と柔らかい声色こわいろでお礼を口にした。

—美女の笑顔みどりって、同性でも見惚れてしまうんだなあ、と朱亞はしみじみ考えながらも、彼女が着替えやすいようくくるりと背を向ける。

「着替え終わるまで待っていますね」

「別に見ても構わないわよ？ 女同士なのだから」

「いーえ、人の素肌はおいそれと見ていいものじゃないと、おじいちゃ……祖父に教

わりましたから」

「ふふ、いい人に育てられたのね」

「はい。血の繋つながりがない私を、ここまで育ててくれた人ですから」

さらりと口にしてから、朱亞は自分の口元を手で覆つた。

祖父の家の近くで、赤子だった朱亞が泣いていたらしい。両親が近くにいるのかと探したが、一向に見つからず……朱亞を引き取り育てるに至った。——という経緯は、旅立つ相談をするため村長家を訪れたときに、初めて知つたこと。

朱亞は年齢を重ねるとともに、本が読めるようになった。そして物語の中に頻繁に出てくる『父』と『母』の存在が気になり、祖父に尋ねたことがある。だが、困つたように口を閉ざし、ぐりぐりと朱亞の頭を何度も撫でるばかりだった。

これは祖父を困らせる質問なのだと気づき、それからはなにも聞かずに、生きる術すべをたくさん教わり、今に至る。

シユルシユル、パサッ、と衣擦れの音がいやに大きく聞こえる。雨音も強いはずなのに。朱亞はその音を聞きながらぼんやりと小屋の天井を眺めていた。

「——ねえ、朱亞」

「はい、なんでしょうか」

突然の質問に、朱亞は目を丸くして腕を組んで考えてみる。まだ着替えている最中のよう、桜綾が動いている音がした。振り返らずにうーんと唸る。

「今のところありません。これからあるかもしれません、祖父と暮らしているときは楽しかったし、旅を始めてからも楽しかったので」

「そう。人生を楽しめるのはいいことね」

「えっと……？」

桜綾の言葉は淡淡としていたが、自分の人生を悲観しているように感じられて、朱亞はわかりやすく戸惑った声を上げた。

彼女がいつたいどんな思いで、そんなことを口にしているのか想像できない。

「わたくしね、逃げ出してきたの」

ぱつり、と桜綾が言葉をこぼした。小声だったが朱亞の耳にはしっかりと届き、思わず「えっ？」と聞き返す。

「見ての通り、わたくし、美人でしよう？ 引く手あまたなのよ。その噂を聞きつけた皇帝陛下が、わたくしの住んでいる街に来ると聞いて、逃げ出してきたの」

朱亞は自身の目的地を思い出す。今聞いた話は村で出会った女性が教えてくれたものと同じということも。

確かに桜綾は絶世の美女だから、皇帝が自ら迎えに行くのも納得だ。とはいえ、逃

げ出してきたということは、嫁ぐつもりはないのだろう。

「それで山に？」

「ええ。途中まで馬で移動してきたのだけど……化け物に襲われてしまつたの」

「化け物？」

「あんなにおぞましいものは、初めて見たわ。馬を休ませようと川辺で水を飲ませて

いたら……」

彼女の声は震えていた。おそらく、川に棲みついている怪物に襲われたのだろう。頭の中に地図を思い浮かべながら、よくこの小屋までたどりつけたと感心した。

「桜綾さんは、外のものに襲われてしまったのですね」

「外のもの？」

「はい、祖父が教えてくれました。私たちが住んでいる『内なる世界』の他に、『外なる世界』が存在していて、その場所には人を食らう怪物たちが暮らしている——と。その怪物たちのことを総じて『悪鬼』と呼んでいます。悪鬼たちはこの世界にやつてきて災いを招く存在——あ、『外なる世界』にはそういう悪鬼の他にも、人間の味方をしてくれる神獣もいるそうですよ！」

祖父が教えてくれたことを振り返しながら、言葉を紡ぐ朱亞。祖父は決して悪鬼に近づいてはいけないよ、と彼女に教え込んだ。非力な人間など悪鬼にとつては、ただ

のごちそうでしかないのだ、と。

祖父の話を初めて聞いたとき、朱亞の背筋に冷たいものが走った。祖父は淡淡といろんな悪鬼がいることを教えてくれた。

語っていた内容の中には、人間にとつてよいことをしてくれる神獣もいたが、先に教えられた人を食らう悪鬼たちの話が怖くてたまらず、その日は祖父にくつついて眠つたなあ、と朱亞は肩をすくめる。

「あなたは、そういうことに詳しいの？」

「詳しいかどうかはわかりません。田舎で暮らしていたので、そういう知識を披露? することもありませんでしたし」

朱亞の住んでいた村は、平和そのものだった。『外のもの』は一度も来なかつたし、盗賊や山賊にだつて遭つたことがない。

そういえば、朱亞が旅立つてからだつて、盗賊や山賊と遭つていなかつたな、と自分が強運の持ち主のように思えて、ひつそりと口角を上げた。

桜綾の気を紛らわせるように、悪鬼についての知識をいろいろと披露する。

祖父から教わつた話をこうして誰かに話すのは初めてで、少しだとたどしかつたが、桜綾はずつと相槌あづちを打つて聞いてくれた。

悪鬼の話をしている間に、桜綾が着替え終わり、「もういいわよ」と声をかけられ

たので、くるりと振り返る。

「わあ、すつごく似合つています！」

「ありがとう。これ、とてもいい生地ね。きちんと綺麗にして返すから、今だけ借りるわ」

祖父が朱亞のために用意した服は、生地が赤く金色の糸で刺繡がされていた。

おそらく、いつか彼女が結婚するときに着てほしいという願いが込められた花嫁衣裳。

朱亞は花嫁衣裳だと気がついでいなかつたが、桜綾は彼女の祖父の意を感じ取り、キヨトンとした表情の朱亞に、彼女は苦笑する。

「もしかして、結婚式を見たことがない？」

「結婚式? そういえば、一度も見たことありませんね」

村の人たちはすでにそれぞれ男女で暮らしていたし、結婚していないのは朱亞も含めた未成年の子どもたちだけ。その子どもたちだつて数えるくらいしかいなかつたため、十五年間一度も結婚式を見たことも参加したこともない。

「結婚式の花嫁は、こういう格好をするのよ」「あ、それって花嫁衣裳だつたんですか!？」

「そうよ。ごめんなさいね、わたくしが先に袖を通してしまって」

心底申し訳なさそうにうつむく桜綾に、朱亞は彼女に近づいて緩やかに首を左右に振った。

「私が袖を通すのはいつになるのかわかりませんし、服は着るためにあるのですから。気になさらないでください」

「……あなたは、とてもいい子ね」

桜綾がそっと手を伸ばし、朱亞の頭を撫でた。その優しい手つきに、朱亞は表情を綻ばせた。祖父に撫でられることも好きだったな、と目を伏せる。

「それにしても、朱亞を育てたおじいさんは、とても博識だったのね。もっと話を聞かせてくれないかしら？」

「もちろん構いませんよ！」では、なんの話にしましようか？」

祖父のことを褒められて、朱亞はパッと明るい笑顔になった。

「水辺には、どんな悪鬼がいるの？」

「馬腹ハブや水虎スイコ……水盧スイロがいますね。それぞれ少しずつ属性が違うらしいです。でも、

本当によくご無事でしたね」

「わたくし、昔から結構な幸運に恵まれているのよ」

自信満々に胸を張る桜綾に、朱亞はふふっと笑みをこぼした。その笑みを眺め、桜

綾はもう一度頭を撫でる。

「朱亞はいくつなの？」

「私は十五です。桜綾さんは……私よりも年上、ですか？」

「ええ。今年十八になつたわ。朱亞のおじいさんは、あなたにたくさん知識を与えてくれたのね」

目を細めて柔らかく言葉を紡ぐ桜綾に、朱亞は祖父の顔を思い浮かべながらゆくりと首を縱に動かす。

祖父は、本当にいろいろなことを朱亞に教え込んだ。彼女よりも先に逝ってしまうことは確実だったからか、どうすれば暮らしていくのかを、生きるための知識を丁寧に授けた。

最期の言葉は『自由に生きなさい』だったことを思い出し、朱亞の瞳に涙がにじむ。それに気づいた桜綾が、両腕を広げて「おいで」と彼女を呼んだ。

彈かれたように桜綾を見つめる朱亞。ぽろり、と彼女の瞳から涙が一粒こぼれ落ち、頬を伝う冷たさに、自身が泣いていることに狼狽する。

「ああ、だめよ。擦すつては」

目元を乱暴に拭うと、桜綾に止められた。祖父が亡くなつてからまだ半年も経つていない。旅立つたのは悲しみを紛らわせるためにも、異郷の地でいろんなことをこの

目でしつかりと見ようと思つたからだ。

「——私、おじいちゃんのこと、大好きだつたんです」
「……ええ」

「でも、おじいちゃんと、血が繋がつてなかつたんです……」
「……家族の繋がりは、血だけではないわ」

慰めるように、目尻の涙を拭う桜綾。朱亞の大きな瞳から、ぽろぽろと涙が流れていく。

「大好きな人を失つたんですもの。つらかつたわよね」

桜綾の優しい言葉が、朱亞の心に沁み込んでいく。村にいたときも、村人たちから慰めてもらつた。そのときには、こんなに泣いていない。

祖父は村人たちから敬われていたようで、生前はよく相談に乗つてほしいと村人が家を訪れ、お礼として畑で採れた野菜や山で採れた山菜などをお裾分けさせていた。そんな祖父が朱亞の誇りでもあり、唯一頼れる人でもあつた。祖父が亡くなつてから数週間、ぼんやりと暮らしていた朱亞のことを、村人たちは気にかけてくれていたが、立ち直るには少し時間がかかつた。

このままじゃいけない、と家の中を掃除しているうちに、一通の手紙を見つけた。
『朱亞へ』と丁寧な字で封筒に書かれていた。

迷うことなくその手紙に目を通し、ぎゅっと抱きしめた。その手紙はいつでも読み返せるよう荷物の中に入れてある。

「——私も、おじいちゃんみたいな人になりたい、と思つたんです」

村人から慕われていた祖父の姿を思い浮かべ、いつか自分も誰かに頼られる人になりたいと強く願つた。

あのまま村で暮らせば、きっとそれなりに楽しく過ごすことができただろう。村の人たちは、朱亞に優しく接してくれたし、ずっとこの村で暮らせばいいとも言ってくれたから。

旅に出ようと考へ出したのは、祖父の話を聞いていたからだ。あの村を訪れるまで、いろいろなところを旅していくと楽しそうに語る姿を見ていた。山と森に囲まれた村で暮らしていた朱亞は、知らない世界に思いを馳せ、胸を躍らせていた。

祖父は旅をしていた途中、畠仕事をしていた村娘に「目惚れをして、村長に頼み込み村で暮らすようになったのだと、笑いながら教えてくれた。

「だから、故郷を旅立つたのね」

桜綾にぽつぽつと村でのことや、祖父のことを話しているうちに、段々と落ち着きを取り戻す。

くりと息を吐き、満面の笑みをこぼした。

「とりとめのない話を聞いてくださって、ありがとうございます。なんだか祖父が亡くなつたことを……ようやく受け止められた気がします」

胸元に手を置いて目を閉じる朱亞。桜綾は、そつと彼女の背中を撫でた。その撫で方があまりにも優しくて、心に小さな灯^ひがともる。

朱亞が「ありがとうございます。もう大丈夫です」と再び感謝の言葉を伝えるのと同時に、オギヤア、オギヤア、と赤子の泣き声が耳に届く。

雨脚はまだ強く、白く筋の見える黒雨が降り続いている。そんな中、不自然に聞こえる赤子の泣き声に、桜綾は困惑したように山小屋の窓から外の様子を窺つた。

「こんな強い雨の日に、赤ん坊の泣き声が聞こえる……なんてこと、あるの？」

「……いえ、おそらくこれは、悪鬼の鳴き声でしよう。祖父から聞いたことがあります。人を食らう悪鬼は、赤子の泣き声で人を誘い襲う、と」

助けを求めるような赤子の泣き声を振り払うように、首を振った。旅に出てから一度も悪鬼に遭遇することはなかつたので、この場合どうやり過ごすのが正解なのだろうかと思考を巡らせる。

「本当に、その悪鬼の鳴き声なんかしら？ もしも本当に…………」「この豪雨の中、聞こえるのですよ！ 悪鬼が誘つているとしか思えません！」

山小屋から出ようとした桜綾を必死に引きとめる朱亞。その姿にぐつと唇を噛み締めて視線を落とす。「……そうよね」と桜綾が静かに言うのを聞いて、ほつと息を吐いた。

「それに、また濡れたら風邪をひいてしまいますよ」

「……ええ、そうね。でも、なんだか……落ち着かなくつて」

「それは、そうでしょう。——鳴き声が近づいてきているのですから」

遠かつた赤子の泣き声は、段々と大きく聞こえるようになった。まるで、朱亞たちに狙いを定めているように。

ドクン、ドクンと鼓動が早鐘を打つのがわかる。ぎゅっと桜綾の腕に抱きつき、不安げに視線をさまよわせる彼女を見上げ、窓の外を睨む。

悪鬼を倒す方法は、教わっていない。遭遇してしまつたらなす術もなく食べられてしまう運命だ。カタカタと震える桜綾を落ち着かせるように、わざと明るい声を出した。

「大丈夫ですよ、きっと。ただ近づいているだけでしょう。私たちに気づくとは限りませんし」

「え、ええ。そうだといいのだけど……」
桜綾は朱亞に視線を移す。自分よりも年下の子が、恐怖に震える自分を励まそようと

していることを感じ取り、自身を恥じた。朱亞だって、本当は恐ろしいのだ。その証拠に、身体がわずかに震えている。

「——朱亞、大人しくここで隠れていましょ。きっと、大丈夫よ」

「はい」

桜綾の身体はまだ小刻みに震えていたが、心は平静を取り戻したようだと判断し、朱亞は安堵の息を吐いた。

恐怖で錯乱し、この小屋から飛び出したら……その瞬間、人を食らう悪鬼に襲われるだろう。

朱亞と桜綾はただじつと、二人で抱き合い山小屋の中で過ごした。

赤子の声が遠ざかるまでは、と息を殺して窓の外を見つめる。外に出ることはしない。そのうちに、段々となにかが小屋の近くをうろついている音が聞こえてくる。

「——ツ！」

思わず桜綾が自分の口を手で塞ぐ。油断すれば悲鳴を上げるところだった。それは、朱亞も同じだ。

——窓の外では、異形の姿をした悪鬼が、餌を求めて歩いていたのだから。
〔抱鶲〕
ホウキヨウ

朱亞が喉を震わせながら、掠れた声で悪鬼の名を口にする。

抱鶲——それは羊のような身体に人面、腋の下に目があり、歯は虎で人の爪を持つ人を食らう悪鬼だ。

気づかれないように、頭を低くして抱鶲が去るのを待つ。オギヤア、オギヤアと耳につく鳴き声を上げながら、朱亞たちのいる山小屋をぐるりと一周しているようだ。心臓の鼓動の音が、こんなに強くなるのだと、朱亞は初めて知った。異形のものを視界に入れると、こんなにも身体が震えて思うように動かなくなるのか、と。

雨脚は強いままだ。見つからないようによせていくが、このままでは状況がわからない。朱亞は意を決したように顔を上げ、抱鶲がどこにいるのかを探る。

「窓の死角へ」

小声で桜綾に伝えると、彼女はこくりとうなずき、朱亞から離れてそろりそろりと伏せたまま移動を始めた。朱亞も音を立てないように伏せたまま死角へ。

死角に移動し終わってから、抱鶲が窓を覗き込んできた。獲物がいないと判断したのか、オギヤア、オギヤアという鳴き声が遠ざかっていく。

——遠ざかっていったと、思っていた。

その瞬間、抱鶲の腋の下の目が、顔を上げた朱亞をみつけたとばかりに捉え、細められる。

「ひつ」

短い悲鳴を、上げてしまつた。

朱亞は慌てて口元を両手で覆うが、その短い悲鳴を聞き取った抱鶲が山小屋に体当たりをし始めた。山小屋が大きく揺れるほどの衝撃が走る。

「——大丈夫、大丈夫よ、朱亞。きっと、大丈夫——」

恐怖で身体を震わせながら、桜綾は朱亞に手を伸ばした。
このままでは、二人とも抱鶲に食べられてしまう。そう考えた朱亞の行動は、素早く

かつた。立ち上がり、山小屋の扉を開き、抱鶲へ叫ぶ。

「こっちだ！」

外へ飛び出し、冷たい雨に打たれながら駆け出す。抱鶲は出てきた獲物に、勢いよく襲いかかつた。

（私が食べられているうちに、逃げてください）

抱鶲の虎の歯が、朱亞に襲いかかろうとした瞬間——死を覚悟してぎゅっと目を閉じた彼女が、いつまでたっても覚悟した痛みがこす、疑問を抱いて薄目を開くと——抱鶲の頭と胴体が二つに斬られており、ぽかんと口を開ける。

「……え？」

「抱鶲の餌になりたかったのか？ それなら悪いことをしたな。悪鬼を見ると斬らねば気が済まんのよ」

抱鶲の足元に立つて髪をかきあげる大男に、朱亞は目を見開く。

「朱亞！」

山小屋から、桜綾が駆けてくる。そして朱亞の頬に手を添えて、「怪我はない？」と心配そうにくしゃつと表情を歪めながら問い合わせた。

「だ、大丈夫です。……あの。助けてくださって、ありがとうございます」

桜綾はそこで大男の存在に気づいたようで、一瞬硬直した。すぐに朱亞から手を離し、恭しく頭を下げる。

「朱亞を助けてくださいり、ありがとうございます」

彼は二人を交互に眺め、両肩を上げた。

「いや、余は我が花嫁を迎えて来ただけだ。——桜綾、だつたな？ 赤色の衣装を身にまとつてゐるということは、余の花嫁になる決心がついたということか？」

朱亞は「えつ？」と変に高い声を出してしまつた。その言い方によると、この男性は、絶世の美女を迎えて来たという噂がある皇帝ではないか、と。

雨に濡れた髪は水分をたっぷりと含みながらも、艶やかさを隠せていない。腰近くまである髪を一つにまとめている。おそらく、濡れ羽色とはこのことを指すだろう。緋色の瞳は切れ長で、こちらをじっと觀察するように動いている。体格がよく、服の上からでも鍛えあげられた肉体だとわかる。濡れて服が身体に密着しているからかも

しないが。そして、すらりとした鼻筋に、厚めの唇。年の頃は二十歳過ぎ、といつたところか。

——美丈夫というのは、こういう人なのかなしら、と桜綾と皇帝を眺めた。絶世の美女の桜綾に見劣りしない。並んでいるときっとお似合いだと誰もが絶賛するであろう二人の視線が交わった。

「皇帝陛下！ ご無事ですか!?」

焦りの混じった声で、皇帝に近づいてきたのは、きっと彼の護衛だろう。

「おいおい、山の中だからって、『皇帝陛下』と呼ぶのはないだろ。公務ではないのだから」

「しかし……」

「頭の固い奴よ。ああ、それよりも余の花嫁を見つけたぞ、彼女だ」
すっと桜綾に手を向ける。彼女は一瞬不快そうに眉根を寄せて、それから朱亞の手をぎゅっと握る。

「——確かに、噂通り美しい女性ですね。陛下が望むのもわかります。が、今はとりあえず馬車へお戻りください。濡れたままでは風邪をひきますよ。お二人とも、一緒に来てください。この雨の中、置いていけません」

すらすらと言葉を紡ぐ男性は、皇帝の背中をぐいぐいと押していく。朱亞と桜綾は

顔を見合させ、二人についていくことにした。

抱鶲を一撃で倒した人だ。悪鬼に対して対抗手段のない二人は、彼らについていくしか選択肢がなかった。その前に、朱亞は山小屋から自身の荷物を手にし、急いで彼らのあとを追い、桜綾とともに馬車に乗る。桜綾の前に皇帝、朱亞の前に護衛が座ると馬車が動き出す。

「くしゅんっ」

雨に濡れたため、身体が冷えたようだ。桜綾が「大丈夫？」と朱亞の顔を覗き込んだ。すっと、目の前にふわふわの大きな布——タオルが差し出された。

「あの？」

「拭いておけ。風邪をひくぞ」

「い、いえつ。皇帝陛下こそ、お使いください！ 風邪をひきますよ！」

朱亞が勢いよく首を横に振り遠慮すると、彼は目をぱちくりと瞬まばたかせてから、数枚の大きな毛巾を取り出す。

「これだけたくさんあるんだ。一枚でも二枚でも、使ってくれて構わんぞ」

にこにこと笑う皇帝。どうすればいいのかわからず、助けを求めるように桜綾に視線をやると、彼女は毛巾を受け取つて、朱亞の頭に被せて力強く、彼女の髪を拭いた。

「よ、桜綾さん！」

「濡れたままでは身体に悪いわ。ここは、陛下のご厚意に甘えましょう」

「……は、はい」

朱亞の髪を拭き終ると、顔をぐいぐいと拭いてきた。あまり痛くはないが、彼女の手が震えているのを視界に入れ、桜綾の瞳をじっと見つめる。

「ごめんなさい、桜綾さん」

「……本当よ。どうして飛び出していったの」

彼女の声は震えていた。朱亞が申し訳なさそうにうなだれると、桜綾はこつんと自分の額を合わせた。

「あのままでは、二人とも抱鶴に食べられてしまうと思いました。それなら、どちらか一人だけでも生き残るほうがよいと思つて。抱鶴と視線が合つたのは私だったので、きっと私のほうを追つてくると判断しました」

「ほう？」と皇帝が興味深そうにつぶやく。護衛も感心したように朱亞を眺めていた。その視線を受けて、ゆるりと首を動かして二人に視線を移す。

「ああ、そういうば自ら紹介をしていませんでしたね。わたしは李梓豪リースーハオ。皇帝陛下に仕えています」

そう名乗った青年は、おそらく皇帝と同じくらいの年齢だろう。落ちついた口調で聞き取りやすい声をしていた。

黄色みがかった薄茶色の髪を肩まで伸ばしていて、雨に濡れて水分を含み、ぱたりと毛先の束から水滴が落ちている。

瞳の色は蒲公英のよう鮮やかな黄色だ。朱亞がじつとその瞳を見つめると、梓豪はさつと目を隠すようにうつむいた。

「気味が悪い瞳の色でしよう？」

「あ、いえ。蒲公英の色だな、と思つて。蒲公英つていろんな効能があるんですよ。仙人も愛用しているらしいです」

「……はい？」

あまりにも別方向からの言葉が返ってきて、梓豪は呆然としたように朱亞を見つめてしまつた。彼女はにこりと微笑み、祖父から教わつたことを口にする。

「擦牙サンガ烏須髮ウツカヒ還少丹ハコダ」という処方がありまして、これは歯を丈夫にし、筋と骨を強壮ヨウショウさせる腎經の薬のことです。八十歳以下の人がこの少丹を飲むと、ひげや髪の毛が黒くなり、落ちた歯も再生できる。少年が飲めば老いるまで衰弱しないそうです」

「それもおじいさんの教え？」

桜綾の問いに、朱亞は素直にうなずく。多種多様な知識は、朱亞の頭の中に詰め込まれていた。

「仙人ねえ……」

ぱつりとつぶやきをこぼす皇帝。その目は面白いものを見つけたかのよう、弓なりに細められた。そんな彼に梓豪がこほんと咳払いをすると、朱亞は喋りすぎた？と自分の手で口を覆う。

「このまま後宮へ向かいたいが……そなたたちに風邪をひかせるのは忍びない。宿屋で一泊してから後宮にするか」

「お待ちください、陛下！ 助けていただいたことは感謝しておりますが、わたくしは陛下の後宮に入る気はございません！」

後宮に入れば二度と外へは出られない。そんな人生を送る気はまるでなかつた桜綾が焦りをにじませ皇帝に叫ぶ。

彼女は自分に自信があった。商家の娘として生まれ、両親たちの商売を手伝うつもりでいた。ゆくゆくは家を繼ぐのだと自身の人生を定め、そのための知識を頭の中に叩き込んでいる。

それが狂い始めたのはいつからだろうか。『絶世の美女』と言われるようになつてからだと、桜綾は考える。確かに自分は美しいという自負はあつたが、その噂がまさか皇帝の耳にまで届くとは想像していなかつた。

だから、皇帝が自分をわざわざ迎えに来るという噂を入れ、衝動的に馬に乗り逃げ出してきたのだ、と桜綾はきゅつと唇を結ぶ。

馬以外なにも持たず山へ迷い込んだが、川辺では馬は悪鬼に襲われてしまう。あてもなく山の中をさまよつている最中に、激しい雨が降り出してきた。
朱亞があの山小屋の扉を開けて呼んでくれなかつたら、今頃自身がどうなつていたかわからない。

「それは無理だ、諦めろ」

皇帝はにんまりと口角を上げる。桜綾は軽く両手を握り、「なぜですか」と震える声で尋ねる。皇帝は腕を組み、不敵に笑う。
「後宮に入れたら、面白そうだから」

キッと皇帝を睨む桜綾。彼は睨まれたことなど気にしていないようで、微笑んだ。
「そんな理由で……」

わずかに桜綾の肩が震えていた。梓豪が「陛下」と少しきつめの口調でたしなめる
と、彼は肩をくぐめて息を吐く。
「とりあえず、身体も冷えているだろうし、腹も空いているだろう？ 宿屋でゆつくりと休みなさい」

朱亞はうなずき、桜綾は自身の怒りを抑えるかのように、深呼吸を繰り返していた。
「ところで、この馬車はどこに向かっているんですか？」
「帝都、紅鏡だ。余が住んでる街。ああ、そうだ梓豪。紅鏡に着いたらこの娘を案

内してやれ】

「え？ ですが、陛下……まずは、宮殿にお戻りになられたほうが……」「あの目を見よ。あんなに楽しみにしているのに、観光もさせないのは酷であろう？」皇帝はくつくつと喉を鳴らして、梓豪の視線を朱亞に誘導すると、まだ行ったことのない場所に対して若緑色の瞳をらんらんと輝かせている姿が確認できた。

「あ、そういうえば名乗っていませんでした。私は朱亞です。苗字はありません」すっかり話がそれてしまつたが、梓豪が自己紹介をしてくれたことを思い出し、朱亞は自身の胸元に手を置いた。「苗字がない？」と全員が目を丸くして彼女を見つめる。

「おじいさんも苗字がなかつたの？」

朱亞はこくりとうなずく。故郷には苗字を持つている人がいなかつたが、名前を呼べばよかつたので困ることはなかつたと説明した。

旅を始めてから苗字の存在を知つたくらいなので、自身の知識が偏つていると彼女は理解している。

「変わつた村に住んでいたようだな」

「平和な村でしたよ。山奥でしたが、悪鬼にも遭いませんでした……」

悪鬼の怖さは祖父からようく教わっていたが、実物を目にしたのは抱鶲が初めてだ。

よくあの恐怖の中、山小屋を飛び出せたな、と朱亞は改めて自分に感心した。

「……そのような村があつたとは、知りませんでした」

「余も梓豪も紅鏡で生まれ育つたからな。……とはいえ、さすがに皇族である余も、そんなに遠くの村まではよく知らん。そなたが暮らしていた村があつたことに驚いている……が、そなたの祖父は博識だったのだな」

祖父のことを褒められて、朱亞は心底嬉しそうに口元を緩め、何度もうなづく。

その表情を見て、本当に祖父のことが大好きだったのだと感じ、桜綾はそつと彼女の頭を撫でた。

「桜綾さん？」

「……とりあえず、陛下のおつしやる通り、身体を温めないといけないわね。風邪をひいてしまいそう」

「ちょうど雨もあがつたようだ」

皇帝が馬車の窓から空を見上げた。先ほどまでの黒雨から一転し、からりと晴天になつた。白く照り輝く太陽が顔を覗かせ、それと同時に、馬車が動きを止める。

「どうやら宿屋に着いたようだ。ああ、料金のことは気にせず、くつろいでくれ」馬車の扉を開き、梓豪から降りる。辺りを見渡してから、朱亞に手を差し伸べた。

朱亞はその手と梓豪の顔を交互に眺め、そつと自分の手を重ねて馬車を降りた。

二章 宿屋で休憩

高貴な方はこうやつて馬車を降りるのかしら、きっと今回だけの特別扱いなのだろうと考え、ほんの少し心がくすぐつたくなる。

きっと**抱鶲**^(ホウキヨウ)と遭遇したことに同情しているのだろう。だからこうして、優しくしてくれるのだろう。そう思考を巡らせ、朱亞は梓豪が優しい人なのだと感じた。

「ありがとうございます」

手を離して頭を下げるに、梓豪は首を横に振って、「気にしないでください」と柔らかい声色で言つた。**桜綾**^(ヨウリン)も彼の手を借りて降り、最後に皇帝が降りる。

「この状況で、余の妻にならないほうがおかしかろう?」

立派な馬車から降りてきた朱亞たちは、周囲の人たちから注目を浴びていた。朱亞よりも桜綾のほうが目立つている。そもそもどう、花嫁衣裳を着ているのだから。皇帝の格好はおそらく質素なものだ。だが、彼の存在感はすさまじく、桜綾と並ぶと美男美女でとてもまぶしい。神々しさを感じるほどに。

「とりあえず、まずは風呂に入れ」

「それがよろしいでしよう。お二人とも身体が冷え切つてゐるようですから、しつかり百を数えるまで出てきてはいけませんよ」

まるで幼い子に言い聞かせるような梓豪に、朱亞は「はあい」と明るく笑いながら返事をした。桜綾は一度大きなため息を吐いてから、そつと朱亞の肩に手を置く。「行きましょう、朱亞。この宿屋なら、わたくしも知つてゐるところだから」「こんなに大きな宿屋を……?」

「ええ。お父さまの仕事の関係で。それでは、遠慮なくくつろがせていただきますわ、陛下」

桜綾はにつこりと微笑みを浮かべて皇帝に声をかけ、朱亞の肩に置いた手を離し、代わりに右手を握つて歩き出す。朱亞は目の前に広がる大きな宿屋に果然としていた。噂では聞いたことがある。近隣の街に大きな宿屋がある、と。しかし、朱亞の想像以上の大きさで、思わず目を丸くしてしまう。

二階建てのようで、上のほうは黄色の、下のほうは赤い**煉瓦**^(れんが)でできていた。ところどころ、朱色で絵が描かれている。その絵がどんなものなのかなはわからなかつたが、鳥のように思えた。

「桜綾さん、この鳥のような絵はいつたい?」

「あ、おじいちゃんから聞いたことがあります」

東に青龍、西に白虎、北に玄武、南に朱雀。朱亞は指折り数えながら口にする。

「わたくしたちの暮らしている国は、朱雀が守護神なのよ」

「それで朱雀の絵が描かれているんですね」

なるほど、とじつと朱雀の絵を見つめていると、桜綾が彼女の手を引っ張った。

「今はお風呂が先よ。着替えは宿屋のものを借りましょうね」

「はい」

雨に濡れて身体が冷えていた。水分をあのふわふわな毛巾で吸い取ったが、服は濡れたままだから。そう自覚すると、一気に寒くなつたような気がして、ぶるりと震える。

「これは桜綾さま。いらっしゃいませ」

「ごきげんよう。悪いけれど、お風呂を貸していただけるかしら？ それと今日はこちらでこの子と休みたいの。ああ、代金はそちらの方から受け取つてくださいね」

宿屋の主人であろう中年の男性に話しかけられ、桜綾はにつこりと満面の笑みですらすらと言葉を紡ぎ、彼女たちの後ろを歩いていた皇帝に顔を向ける。男性は彼らに気づくと一瞬目を大きく見開き、緩んだ頬を引き締めてから、こくりと首を縦に動かした。

「かしこまりました。お風呂はすでに用意していますので、いつでもお入りください」

「ありがとうございます。行くわよ、朱亞」

「あ、はい。……桜綾『さま』？」

「わたくしが偉いわけではないのよ。創業のときお父様がこの宿屋を支援したの。だから、わたくしのこともそう呼んでくださるの」

つかつかと足音を立てながら、宿屋の中を歩く。朱亞はどこに向かっているのだろうと考えながらも、物珍しさに辺りをキヨロキヨロと見回す。

「ここに泊まる人って、大金持ちじゃないとダメですよね……？」

「大丈夫よ、陛下が代金を払うから」

「うーん、こんな贅沢な宿屋、初めてです」

「それなら堪能しないとね。でも、今はお風呂が先よ！」

桜綾は近くを歩いていた女性の従業員を呼び止めて、今からお風呂に入るから着替えを用意してほしいと伝える。それからもう一つ、頼み事をした。

もう一つの頼み事は、今着ている花嫁衣裳を丁寧に洗つて乾かしてほしい、だった。それを聞いた朱亞は桜綾のことをマジマジと眺める。

「ごめんなさいね、せつかくおじいさんが用意してくれた花嫁衣裳を、わたくしが濡

らしてしまつて……」

「あ、いえ！ 気にしないでくださいっ」
しゅんとうなだれる桜綾に、朱亞はブンブンと勢いよく顔を横に振った。この花嫁衣裳を着るように勧めたのは自分自身であり、そもそも花嫁衣装であることも知らなかつたのだ。

「いいえ、気にするわ。朱亞、謙虚なのはあなたのはよいところだと、この数時間で知つたけれど、人の厚意は素直に受け取るものよ？ それに、ちゃんと綺麗な状態で返さないと、わたくしが自分を許せないの！」

朱亞と視線を合わせるように軽く膝を曲げ、意志の強さを感じさせる栗皮色の瞳で真剣に若緑色の瞳を射貫く桜綾に、一瞬言葉を呑んで、こくりと首を動かす。

その様子に、桜綾は安堵したように顔を綻ばせた。
話を終え、風呂場へ足を進めた。脱衣所で桜綾は花嫁衣裳を脱ぎ、とても丁寧に折りたたんで籠に入れる。

「朱亞も脱いだらこの籠に入れてね。洗濯して乾いてから戻つてくる仕組みなの」「……それはまるで物語のお姫さまみたいですね……」

自分ることは自分で、と躊躇された朱亞は、自分で洗濯できると言いそうになつたが、慌てて言葉を変えた。

「ふふ。こここの宿屋は、お客様さまに最高のおもてなしをするのよ」
「そうなんですね……？」

朱亞も服を脱いで籠にそつと入れた。雨に濡れてぐつしょりと濡れてしまつている服を洗濯させてしまうのは、申し訳ないような気がする。だが、今このときだけはお姫さま気分を楽しもうと心に決めた。
風呂場の扉を開けて中に入り、朱亞はその浴室の広さに歓喜の声を上げる。
「わあ……！」

「大浴場は初めて？」

「はい、初めてです！」

見慣れない広い浴室に、ワクワクした瞳で辺りを見渡す。人の姿は見えず、この場にいるのは朱亞と桜綾だけのようだ。

「うふふ。それじゃあまずは、髪と身体を洗いましようね」

桜綾に案内されて、先に髪と身体を洗う。雨に打たれて冷えた身体は、洗つていてるうちに少しづつ温まつていく。

「綺麗な髪ね」

「えつ？」

「朱亞の髪よ。翠色で、艶があつて綺麗よね」

翠色で、艶があつて綺麗よね

朱亞は自分の髪に触れて毛先を持つてみる。髪色を褒められたことがあつただろうかと過去の記憶を探つたが、祖父に褒められたくらいだつた、と照れたように頬を赤く染めた。

「ちゃんと髪の手入れもしているみたいだし……羨ましいわ」

頬に手を添えて、観察するように朱亞の髪を眺めてから、自身の髪をぎゅっと握る桜綾。

「桜綾さんの髪だつてきれいですよ！ 雰囲気にぴったりです！」

ぐつと拳を握り、熱く語る朱亞に、桜綾は目をぱちくりとさせてくすりと笑つた。

「身体と髪を洗つたら、次は湯船ね。しっかりと芯から温まらないと」

桜綾は器用に朱亞の髪を上のほうでまとめ、自分の髪も湯船に浸からないようにしてから、お風呂に足を入れた。ちやぶんと水音が耳に届き、波紋が広がつていく。

湯船には赤い花びらが浮かんでいた。

「器用ですね」

朱亞は後頭部を触つてみる。解けないように気をつけながらお風呂に入ると、桜綾が彼女に視線を向ける。

「朱亞もできるようになるわよ、きっと」

お湯は少し熱いくらいだつたが、身体が芯から温まつていく感じがして、ほう、と

「

息を吐く。桜綾は朱亞の隣に座り、恍惚の表情を浮かべて身体を解すように手を組んで腕を前に伸ばす。

「広いお風呂つて最高よねえ」

「泳げちゃいそうですね」

「うふふ。幼い頃、わたくしもそう思つて少し泳いじやつた。お母さまにきつく叱られたけどね」

「そのときも、こんなふうに花びらが散つていたんですか？」

赤い花びらを一枚つまみ、桜綾に見せる朱亞。彼女は組んでいた手を解き、顎に人差し指を添えて当時を思い出しながら「そのときはなかつた気がするわ」と答えた。

「今日は特別なのでしょうか……？」

「この宿屋はね、大浴場があるから結構人気なのよ。だから、お客様さまがいつ来てもくつろいでもらえるように、いろいろ試しているみたいなの」

「商売上手な宿屋なのですね」

しみじみと朱亞が言葉をこぼすと、桜綾はふと噴き出してから「そうね」と同意した。

湯船に浸かりながら、二人は会話を楽しんだ。その会話の途中、桜綾の表情が翳る。

皇帝が桜綾を迎えて来るという噂を聞いて、逃げ出してきた彼女。結局見つかってしまった。どんな選択をするのだろうかと答えを待つ。

「……行くしか、ないでしようね。……朱亞、一つ、お願ひがあるのだけど」

桜綾は一度目を閉じてから、朱亞に真摯なまなざしを向けた。そんなに真剣な表情でする『お願ひ』とはどんなものだろうか。不安げに瞳を揺らす桜綾に問いかける。

「私にできることですか？」

「あなたにしかできないわ。朱亞、わたくしの侍女になつてくださいらない？」

「……？」

言葉の意味が理解できなかつたのか、朱亞は猫のように大きな目を見開いて、それから「じじょ？」と首をかしげる。若緑色の瞳には、はつとしたような表情の桜綾が映つていた。

「もしかして、『侍女』がなにか知らない？」

肯定のうなずきを返す朱亞に、思わずとてうように二度見する桜綾。どうやら彼女の知識はかなり偏つていると考え、次の言葉に詰まる。

(この子に与えられた知識は、いつたい――?)

「桜綾さん?」

「あつ、ええと、そうね。侍女というのは、わたくしのことを手伝ってくれる女性のことなの」

「手伝う?」

自分を指す朱亞に、桜綾は自身の胸元に手を置いた。

「そうよ。わたくし……おそらく、このまま後宮に向かうことになるわ。そして、後宮では味方がいない状況になるでしよう。……だから、朱亞。わたくしの味方になつてもらいたいの」

切々と言葉を続ける桜綾に、朱亞は考え込む。後宮の話は祖父から聞いたことがなかつたので、どんなところなのか想像できない。漠然と知つていることは、『皇帝の妻たちが住んでいるところ』という基本的なことだけだ。

「私でよいのですか?」

「朱亞だから、いいのよ」

桜綾は栗皮色の瞳を細め、美しく笑う。美女の笑顔を間近で見て、朱亞は一瞬息を呑み、小さくうなづく。

「緊張の糸が切れたのか、ぱたり、と桜綾の瞳から涙がこぼれ落ちた。
「桜綾さん!」

大粒の涙が、ぽろぽろと彼女の瞳からは溢れ、頬を伝い湯船に落ち、波紋を描く。朱亞はおろおろしていたが、そっと手を伸ばして彼女の涙を指で拭う。

「桜綾さん……」

「ごめんなさいね、あなたを巻き込んで。本当に」

「いえ、そんなことは……」

目元に触れていた朱亞の手を取り、桜綾は柔らかく笑う。互いに頬が赤く染まっていた。先ほどまで感じていた身体の冷えも収まっていた。

「そろそろ上がりましょうか。のぼせちゃつたら大変だしね」

「はい！」

身体はすっかり温まつた。ふと、赤い花びらに視線を移して、再び一枚摘まむ。

「ところでこの花びらって、なんの花だったのでしょうか？」

「これはきっと、赤薔薇だと思うわ」

「……一輪でもすごく華やかだつたんだろうなあ。それをこんなにたくさん入れちゃうなんて、すごいですね！」

大浴場という名の通り、広い浴場だった。花びらの枚数は数えていないが、かなりの量の薔薇が使われていることは、朱亞にも理解できた。

「そうねえ……でも、花の命は短いから。枯れる前の最後の仕事だったかもしれない

わね」

朱亞と桜綾は脱衣所に足を進め、用意された着替えに触れ……

「も、もしかして、この生地は、絹ですか……？」

「あら、朱亞は肌触りでわかるの？」

桜綾はすでに袖を通している。朱亞は自分が絹でできた服を着てもいいのか悩み、

そろりと顔を上げた。

「……本当に私が着ても、よいのでしょうか」

「朱亞もお客様まだもの。構わないわよ」

桜綾の言葉にほっと息を吐いてから、朱亞はそつと袖を通した。こんなにも肌触りのいい生地を身にまとうのは初めてで、ドキドキと胸が高鳴る。

髪をしっかりと乾かしてから、桜綾と一緒に脱衣所をあとにした。

改めて宿屋の内装を見渡す。赤色の鳥がたくさん描かれていて、すべて朱雀なのかしら？ と観賞していると、背後から名を呼ばれて急いで振り返る。

声の主は、先ほどまで一緒にいた梓豪だった。

「はい、梓豪さん。なんでしょうか？」

「これを……」

立ち読みサンプル はここまで